

## 「平和の俳句 10」

2015年10月01日

「東京新聞」の「平和の俳句」入選9月分から、紹介と感想を書きたい。この月は「デモ」に関する句が多かった。「孫も子もここに居るらしデモの列 城(じょう)千鶴子 80歳」  
くいとうせいこう 作者は実際に、息子さん、お孫さんがデモに参加しているとあとで知ったという。連綿と続く志に「感激しました」と。頼もしさ。> 「三才の国民つれてデモに行く 野村さやか 43歳」  
くいとうせいこう 絵本作家の野村さんは、三歳の子供もまた国民だと思ひ出させてくれた。><金子兜太 「三才の国民」が愉快。作者の諧謔で戦争反対のデモがさらに膨らむ。> 「民民民(みんなみんな) 鳴くや夏蟬(なつぜみ) シュプレヒコール 松下大樹 24歳」  
く金子兜太 鳴き合う蟬の音が「蟬時雨」。それを民民と聞くとは、さすがに大学院生。民主主義の、平和の大切さをいつも考えているのだ。> 「向日葵(ひまわり) や兜太(とうた) の文字のプラカード 真鍋倭文子(しづこ) 67歳」  
くいとうせいこう 「アベ政治を許さない」という気迫に満ちた文字は選者・金子兜太氏の文字だが、あらゆる場所でこのメッセージは咲き誇っている。>

今回の「戦争法案反対」のデモは、動員された人々ではなく、自主的な市民参加のデモであることが特徴的だった。老若男女、幼子からお年寄りまでが来ていた。草の根の「九条の会」の活動が大きな要因であったと思う。安倍政権の強引さに市民の怒りが爆発したのである。私も何回、参加したであろうか。「日焼けしていますね」とよく言われ、「デモ焼けです」と答えている。私は目が弱いので、パイロットがかける紫外線をカットするサングラスをつけている。それを見て「やくざみたいですね」とも言われる。「港南台のアルカポネです。密造酒を作っていませんが、平和を造りたいんです」と答えている。

悲しい句がある。「表札を母は外さず七十年 広瀬昭和 76歳」  
くいとうせいこう 亡くなったご主人の名を掲げ続けたのだろう。それは誇りでもあり、意地でもあったろうか。弔旗のごとき表札の、その光を思う。> シベリアに抑留され、長く音信不通になり、亡くなったものと思ひ、位牌を作った。ある日突然、息子が帰って来た。母は「待ちなさい」と言い、位牌を処分してから、息子を家にあげたという話を聞いたことがある。戦争は家族の絆を断ち切る。<父はただ穴を掘ったとしか言わぬ 青砥和子 61歳」  
くいとうせいこう それ以上言えない体験とはなんだろうか。私たちの歴史の土台にそのような体験が満ちているのだが、このまま覆い隠されるのか。> 「九条は全戦死者の御霊(みたま) なり 倉橋千弘(ちひろ) 76歳」  
くいとうせいこう 死者から賜ったことを次の生者につなぐのは、今生きる我々の責務。><金子兜太 数百万におよぶ戦死者の靈魂が憲法九条を生んだのだ。忘れるな。> 戦死者は「犬死に」ではなく、人間の罪を背負って死んだ「贖罪死」である。贖罪死の認識が命の尊厳を悟らせてくれる。九条はこれである。

「東京新聞」は別紙で「平和の俳句 戦後70年」を掲載している。「未復員終(つい)のすみかか武蔵療養所 小俣千珂子 74歳」  
武蔵療養所は、戦時中、精神を病む兵士のために建てられた病院で、5年間に953人が入院し、その8割が統合失調症だったという。彼らは故郷に帰れず、病院が終のすみかとなった。人を殺し合う戦争で心を病むのである。

「にくしみの連鎖絶ちたや八一五 永口(えぐち) 裕子 58歳」  
永口氏は基督教の伝道師で、コリアンタウンで長く在日韓国・朝鮮人の友人たちと暮らしてきた。8・15は韓国では植民地支配から解放された「光復節」である。「戦争が生み出すものは憎しみ。その連鎖を絶ちたい」と強く願うと詠んでいる。